

『蜻蛉日記』地の文の助動詞「たり」「けり」「めり」

—— そのテキスト構成機能をめぐって ——

坂田 一 浩

はじめに

蜻蛉日記地の文の助動詞につき、タイトルに挙げた三つを中心に検討を試みたい。中古散文資料にみられる助動詞の分析にあたっては、そのテキスト構成機能に対する再検討も近年なされてきており（「けり」論において特に顕著である）^{〔1〕}、本稿も基本的にはこの線に沿うものである。では今回なぜあえてこの三つの助動詞を取り上げるのか。そもそも日記文学のテキスト構造を分析するには、記主の視点を軸とした「視界構成」のありようを明らかにする作業が不可欠であると考えられるが、これらの助動詞はその構成のありようを端的に示していると見られるからである。さらに今回の考察を通じて私が特に強調したいのは、このような分析を行うに際しては特に、異なる助動詞のテキスト内における相互作用に目を配る必要があるという点であり、本稿の眼目も諍ずるところ、この一点に尽きる。

一、分析にあたっての視点

本稿において検討を行う、蜻蛉日記地の文の「たり」「けり」「めり」のうち、テキスト構成機能に関して最も分析が進んでいるのは「けり」であろう。平安女流日記文学の中でも本作品はとりわけ「けり」が多用され、それが作品の文末表現の基調をなしていることは既にくつかの先行研究が述べるところであり、そこからさらにテキスト構成のありように関しても、

蜻蛉作者は、自己体験の記述という客観世界を、助動詞「けり」の統括しない規定で表現し、体験記述の補足という主観世界を、助動詞「けり」の統括する規定で表現した。

（塚原鉄雄一九八一）

右のような指摘がなされている。しかし筆者のみるところ、本作品の「けり」に対する従来の分析において欠落、もしくは不十分であると思われる視点が少なくとも二つある（「たり」「めり」においても事情は同じ）。一つは、活用形の違いを考慮に

入れず一括してその意味、機能が問題とされている点。今一つは、当該助動詞が用いられる際、表現主体の「視界構造」²がどのように反映されているかに関わる省察が不十分であるという点である。前者は文法形式に関わる問題、そして後者は当該助動詞が述べ立てる事態内容の、作品世界における位置づけに関わるものである、ともいえよう。

前者の視点の必要性については後述の調査結果が自ずと語るであろうからここでは述べず、今は後者に関してのみ触れておく。そもそも表現主体の経験（見聞内容）を助動詞が述べ立てる場合、一部のもの（とりわけテンス・アスペクト・ムードの助動詞）においては従来から、それがどのような視界の枠組みを反映しているかが問題とされてきた。「けり」論における竹岡正夫（一九六三）の「物語のあなたなる世界」などはその代表的なものである。このような構造を把握することは、表現主体が現実の経験事態から作品世界を再構成するにあたってどのようにテキスト構成がなされたかを明らかにすることに、当然ながら繋がる問題であり、この「視界構造」のあぶり出しは、助動詞によるテキスト構成機能を解明するにあたって不可欠となる前提作業であろう。しかし従来³の考察では分析にあたって体系的な枠組みの設定が不十分だったため、局所的な見解にとどまるきらいがあった。この点を踏まえ本稿では以下の二つの枠組みを導入することとする。

まずは当該助動詞が述べ立てる事態が、表現主体が囁目し、

かつ「こなた」と意識された領域で生起している出来事（「こなた事態」と呼ぶ）か、あるいは、主体にとつて①あなたと意識されたまへ事態または②非めのまへ事態（①②をあわせて「あなた事態」と呼ぶ）であるかという区別³。ただしこの視点を今回の解析対象である日記文学作品に導入するには、これを額面通りに受け取るわけにはいかず、若干の読み換えが必要であろう。

そもそも、スポーツの実況中継のように体験時即発話時が近似的にせよ成り立っている言語活動とは対極的に、日記を書くという行為においては通常、体験時と叙述時⁴との間には何らかの隔たりがある。このことを念頭においた上で次のような一節を読めば、

夜うちふけて外の方を見出したれば、堂は高くて、下は谷と見えたり。片岸に木ども生ひこりて、いと木ぐらがりたる、二十日の月夜ふけていとあかりけれど、木かげにもりて、ところどころに來しかたぞ見えわたりたる。見下ろしたれば籠にある泉は鏡のごと見えたり⁵。（天禄元年七月）

右のようにあたかも体験時におけるまへ事態を述べているかのように見えるものは、どこまでも「擬制的めのまへ」であること、一目瞭然である。元来「こなたくあなた」事態の対立は極めて現場依存的な概念であるが、そもそも日記における「現場」は、現場性を装いつつも常に叙述時からの逆照射を受

けるといふ二重性の上に成り立っている。この意味で、日記文学作品において「こなた／あなた」事態という構造を見る際には絶えずその背後にある体験時⇄叙述時の対立構造にも目を配る必要があるのである。

今一つの枠組みは、述べ立て事態における「わがこと」「ひとごと」の区別である。それは端的にいえば、表現主体にとって、述べ立てる事態が「自己」「自己以外」のいずれに属する（と認識している）か、という区別である。本作品は後述するところでも明らかのように（第三節参照）、「わがこと」「ひとごと」を峻別した叙述が見出される。このような記主の表現意識、さらに広くは日記というテクストのもつ「自照」性からしても、この概念を分析の基準とすることは妥当であると思われる。また、ここに提示した二組の概念を対比してみると、「こなた事態／あなた事態」は主体にとっての物理的親疎を、「わがこと／ひとごと」は、心理的親疎をそれぞれ象徴的に示す指標といえよう。

以下これらの枠組みによりつつ、各助動詞について具体的分析を行ってゆくこととする。

二、蜻蛉日記における「たり」「けり」の 表現機構

本節においてはまず、蜻蛉日記地の文の「たり」「けり」に

ついて個別に検討を試みる。

まずは「たり」から。結論からいえば蜻蛉日記における「たり」は、記主の経験を、体験時の視点に立ちつつ眼前の「こなた事態」として述べ立てるのに用いられる。例えば次のような物語における情景描写の例などは、その典型的なものといえよう。

①暑ければ、しばし戸おしあけて見たせば、堂いと高く立てり。山めぐりて、ふところのやうなるに、木立ちいと繁くおもしろけれど、闇のほどなれば、いと暗がりてぞある。行ふとて法師ばらそせば、戸おしあけて念誦するほどに、時は山寺わざの蝶四つ吹くほどになりたり。（天禄二年六月）162

本作品における「たり」の使用場面をつぶさに検討するに、ここに挙げたような記主囁目の情景についての描写（物語の場面に集中して現われる）に加え、記主自身の動作・心理描写（次例②）、記主のもとに到来した消息・和歌（③）、あるいは夫兼家をはじめとする近親者の到来（④）、以上のケースが「たり」の用例全体の八割以上を占めており、これらはいずれも表現主体にとっての「こなた事態」である。

②今日まで音なき人も思ひしにたがはぬ心ちするを、今日より四日、かの物忌みにやあらんと思ふにぞ、少しのどめたり。（天禄三年二月）210

③あなたにもまだ起きて琴ひきなどして、かく言ひたり。

ひきとむるものとはなしに逢坂の関のくちめの音にぞそ

ぼつる (康保二年七月) 69

④ 思ひやる心のそらになりぬればさはしぐると見ゆるなるらん

とて、返りごと書きあへぬほどに、見えたり。(天曆八年

九月) 24

以上の点から、本作品における地の文の「たり」は眼前のこの事態を表すものとみて誤らないであろう。

次に「けり」に関して考察を進める。まずは活用形によるテキスト構成機能の相違を確認するための指標として、各活用形ごとに「わがこと・ひとごと」の占める比率を調査してみる。

表1に示したのがその結果である。

左の表を見るに、文末形^⑤では「わがこと／ひとごと」がほ

	わがこと	ひとごと
文末	54	92
接続節末	6	57
連体節末	7	27
引用節末	3	19
計	70	195

表1) かげろふ日記地の文の「けり」と「わがこと」「ひとごと」

ぼ1対2の比で現われているのに対し、接続形ではわがことはひとごととの約十分の一であり、その比率に大きな違いがみられる。換言すれば、「けり」は接続形においては文末形に比べ、「ひとごと」を述べ立てる場合が圧倒的に多い。さら

	わがこと	ひとごと
文末	51	190
接続節末	83	67
連体節末	20	108
引用節末	1	9
計	155	274
参考) 用言+「ば」	261	202

表2) かげろふ日記地の文の「たり」における「わがこと」「ひとごと」

にその特異性を浮き彫りにするために、「たり」において同様の調査を行った結果得られた数値を示してみる(表2)。こちらでは接続形でわがこ

とを述べ立てる例の方がむしろ多く(表2参考欄に示したように、助動詞なしのニュートラルな接続形、例えば用言+「ば」における両者の比率をみても、「たり」と同様の傾向を示している)、「けり」接続形におけるわがことの占める比率の少なさは際立っている。次にその意味するところを明らかにするために、「けり」接続形の具体例につき、その述べ立てる特徴をいま少し詳しくみていくこととする。

そもそも蜻蛉日記において接続形の「けり」で述べ立てられる事柄は、「ひとごと」事態であることに加え、「あなた事態」^⑥ わけてもそれが記主の視野に入らない、非めのまへ事態である場合が多くを占める。次例における「開けてければ」と「開ければ」の対比はそれを明瞭に示している。

⑤ 門たたくにおどろかれて、あやしと思ふほどに、ふと開け

てければ、心ざわがしく思ふほどに、妻戸口に立ちて「疾くあけ、はや」などあなり。前なりつる人々もみなうちつけたれば、逃げ隠れぬ。見苦しさにぬざりよりて、「やすらひにだになくなりたれば、いとかたしや」とて開くれば、「さしてのみまゐりくればにやあらん」とあり。(天禄三年二月) 206

ここで「開けて『ければ』」が用いられることにより、その動作が他者によるものであること、さらに記主からみて「あなたなる空間」で行われていることが示され、他方それとの対応によって、「開くれば」という動作が「こなた」において行われていることが特定されるのである。

一方、「けり」の述べ立て事態が記主の視界にないということの延長として、次例のように、「けり」がいわゆる間接経験といわれる用法を示しているものも散見される。

⑥かくて異腹のせうとも京にて法師にてあり、ここにかく言ひいだしたる人、知りたりければ、それして呼びとらせて語らするに、「(中略)」など言ひおきて、又の日といふばかりに山越えにものしたりければ、異腹にてこまかになどもあらぬ人の、ふりはへたるをあやしがる。何ごとによりてなどありければ、とばかりありてこのことを言ひひだしたりければ、まづともかくもあらで、いかに思ひけるにか、いといみじう泣き泣きて、とかうためらひて、「(中略)」とありければ、又の日歸りて、さささんと言ふ。(天

禄三年二月) 215

また「けり」が記主の直接関与し得ない、事態の背景を述べ立てているものとして、「お膳立ての『ければ』」とでも名づけるべき用例が、本作品にはいくつも見られる。

⑦供なるべき人など、さし置きてければ、さてわたりぬ。(安和二年七月) 112

⑧湯屋にもなど敷きたりければ、行きて臥しぬ。(天禄元年七月) 137

⑨京には、昼さるよし言ひたりつる人々心づかひし、塵かい払ひ、門もあけたりければ、我にもあらずながら下りぬ。

(天禄二年六月) 185

⑩さる用意したりければ、鵜飼かずをつくしてひと川浮きてさわぐ。(天禄二年七月) 195

右の諸例に共通してみられる構造は、前件で記主に対する奉仕としての、従者の下準備の様子を述べ、後件で記主がその奉仕を受けるさまが描写されている、というものである。ここで「ければ」が提示しているのは、いわば楽屋裏の出来事であり、その背景提示性が如実に現われている。

以上を簡単にまとめると次のようになるか。すなわち接続形の「けり」においては、

a 「ひとこと」を述べ立てるものが大半(63例中57例)を占める。

b 基本的に、体験時における経験主体の現場の視点に

立った叙述を示すものが多い。

c 経験主体にとつての非めのまへのあなた事態を述べ立てるものが多数を占める。

このように「けり」接続形において「ひとごと」かつ「あなた事態」が多く見られるのは、「けり」がもつ背景提示性と、接続節の従属性がそこで重ね合わさり、結果、主体にとつての「疎」あるいは「ワキ」なる事態の述べ立てを相乗的に誘発するためだと考えられる。

一方、文末に現われる「けり」には、ひとごとと、わがことが等しくみられ、さらにこなた、あなたの両事態もともに見出される。これらを見やすくするために、いくつかの場合分けしつゝ示してみよう。

I 体験時の「けり」

I-1 こなた事態（現場目睹）の「けり」

⑪心ほそうてながむるほどに、出でし日つかひしゆするつき
の水は、さながらありけり。（康保三年九月） 78

I-2-a あなた事態（現場目睹）の「けり」

⑫をかしさに、やをら端の方にたちいでて見いだしたれば、
月いとをかしかりけり。（天延二年一月） 257

⑬帳のほころびよりかき分けて見出せば、すのこにともした
りつる火は、はやう消えにけり。（天延二年四月） 268

I-2-b 非めのまへの、あなた事態を述べ立てる「けり」

⑭落忌のまうけありければ、とかうものするほど、川のあな

だには、按察使の大納言の領じ給ふところありける、このころの網代御覽すとてここになんものし給ふと言ふ人あれば、（安和元年九月） 96

⑮助（＝道綱）、寮の使にとて祭にものすべければ、そのことをのみ思ふに、人（＝遠度）はいそぎの果つるをまちけり。（天延二年四月） 269

II 事態に対する叙述時点からの捉え直し（叙述時の「けり」）

II-1 わがこと

⑯かやうに胸つぶらはしき折のみあるが、世に心ゆるびなき
なん、わびしかりける。（康保三年八月） 79

⑰「めでたのこことや」とぞ、心にもあらでうち言はれける。
（天禄三年五月） 236

⑱心の鬼は、もし、ここ近きところに障りありて、帰されて
にやあらんと思ふに、人はさりげなけれど、うちとけずこそ思ひあかしけれ。（天禄三年閏一月） 225

II-2 ひとごと

⑲そのほどの（兼家ノ）心ばへはしも、ねんごろなるやうな
りけり。（天曆九年） 28

⑳絶えぬるか影だにあらば問ふべきをかたみの水はみくさ
ぬにけり

など思ひし日しも（兼家）見えたり。例のごとにてやみに
けり。（康保三年八月） 78

㉑（小弓ノコトヲ）つごもりがたにせむと定むるほどに、（中

略) 天下人々なると、ののしること出できて、紛れにけり。(安和二年三月) 102

㉒(兼家ハ) ただなりし折はさしもあらざりしを、かく心あくがれて、いかなる物もここにうちおきたる物とどめぬ癖なんありける。(天曆十年秋) 34

III 時点表示

㉓今は三月つごもりになりけり。いとつれづれなるを、…(天祿二年三月) 152

㉔この月七日になりけり。今日ぞ「これ縫ひて。つつしむことありてなん」とある。(天祿三年三月) 227

㉕その月、三たびばかりのほどにて、年は越えにけり。そのほどの作法、例のごとなればしるさず。(天祿元年十二月) 147

㉖雪風いふかたなう吹りくらがりてわびしかりしに、かぜおこりて臥しなやみつるほどに、霜月にもなりぬ、しはすも過ぎにけり。(天延元年冬) 257

体験時の「けり」では「こなた事態」あなた事態」の二分類が、一方叙述時の「けり」では「わがこと〜ひとごと」の二分類がなじみやすい。これは理由のあることと思われる。まず、体験時の視点に立って「わがこと」を「けり」によって述べたてていると明確に断定できる例が甚だ少ない。あえて挙げるとすれば次の一例となるうか。

㉗いつか、御ありきはなど言ふほどに、涙うきにけり。(康保

三年三月) 74

そもそも体験時の視点から「わがこと」の描写を行うのは主に「たり」の役割であり(それはまた、外面的描写にとどまる傾向が強い)、それに対して「けり」がわがことを述べ立てる場合は、叙述時の視点という高みに立った上で、当該事態を後付的に総括する傾向を持つ(そこから、事態の内面・本質を掘り下げた描写も可能となる)。この傾向は叙述時の「ひとごと」(II-2)になると、さらに顕著に現われる。例えば㉑は、この後に起こる「町の小路の女」の一件を踏まえないと出てこない措辞だし、㉒では後の安和の変により行事がお流れになった経緯を俯瞰的な視野から述べている。また㉔の「けり」は、一つのエピソード末に位置しており、当該ストーリー全体を見渡した上で、話にオチをつけるものといえよう。このように叙述時の視点に立って述べる場合、対象事態そのものをひとつの大きな「あなた」事態として捉え、時間、空間を俯瞰的視点から見る傾向が顕著となるため、いきおいそこでは、体験時の現場の視点に立った「こなたあなた」の区別が解消され、代わって「わがこと〜ひとごと」の対立軸が前面に出てくるものと思われる¹⁰。

また、IIIに掲出した時点表示の「けり」には、体験時(㉓㉔)、叙述時(㉕㉖)、特に㉖は時の経過を俯瞰した叙述で、体験時の視点ではあり得ない)、いずれの場合もあるが、そもそも「時点」の述べ立てとは、「わがこと〜ひとごと」「こなたあなた」

を超越した事態（渡辺実一九九一に従えば「よそごと」）である。別に一項目として立てた所以である。

さらに時点表示の「けり」は、⑳のような話のオチに用いられた「けり」とともに、場面転換機能を有しているものとみられ、これも本作品におけるテキスト構成機能を考える上では不可欠な一面であるが、今回の考察では割愛せざるを得ない。

さて、接続形において特に顕著であった「けり」の背景提示性は、「たり」との共起によってその機能を一層はつきりと示す。次節ではこの点について検討することとしたい。

三、蜻蛉日記テキスト上における「たり」

「けり」の連動と両者の表現領域

蜻蛉日記においては、「けり」～「たり」共起構文がしばしば見られる。テキスト構成における両助動詞の連動性をみるために、本節ではこれについて検討を行う。

㉘今はひとりをたのむたのもし人（＝倫寧）は、この十一年のほど県ありきにのみあり、たまさかに京なるほども四五条のほどなりければ、われは左近の馬場を片岸にしたれば、いとほるかなり。（康保三年八月） 77

㉙片岸に木ども生ひこりて、いと木ぐらがりたる、二十日の月夜ふけていとあかりけれど、木陰にもりて、ところど

ころに來しかたぞ見えわたりたる。（天禄元年七月） 138
㉚客人の御方にとおほしかりける文を、持てたがへたり。（安和元年五月） 86

㉛かしこにも女方につけて申しつがせければ、その人の返りごと見せにあり。（天延二年三月） 264

㉜助をあけくれ呼びまとはせば、つねに（速度ノモトニ）ものす。女絵をかしくかきたりけるがありければ、取りて懷に入れてもて來たり。（天延二年四月） 275

㉝さてしばしば夢のさとしありければ、違ふるわざもがなとて、七月、月のいとあかきに、かくの給へり。（安和元年七月） 87

㉞ましてこれよりは、なにせんにかはあやしともものせんと思ひつつ暮らし明かして、格子などあぐるに、見出したれば、夜、雨の降りけるけしきにて、木ども露かかりたり。（天禄元年五月） 122

これらの例では、「けり」が従属節に用いられて背景事態の述べ立てを、一方「たり」は主節末に位置して前景となる事態を示している。

㉟㉞は空間的背景⇕前景の例である。このうち㉞の例において「けり」と「たり」を置換することは困難であろう。なぜなら、「たれば」が述べ立てる「左近の馬場」は記主の居住地、すなわち「こなたなる」空間であり、一方「ければ」が提示する四五条は記主からみて「あなたなる」場所だからである。ま

た㉔の例では文末の「あり」は「たり」に極めて近い機能を担っている。ここで「かしこ」という語が用いられている点にも留意したい。

「けりゝたり」共起構又はこのような空間的遠近のみならず、時間的な遠近法を示す場合もある。㉔㉕がその例であるが、㉔では、「木ども露かかりたり」という嘱目の事態を述べるにあたって、「雨の降りける」一夜をその時間的な奥行として提示しているのである。

その一方で実際の用例においては、空間、時間の両遠近法は截然と区別できるものでもないようである。例えば㉔の例では空間的遠近の中にも、「けれど」で述べ立てられる月明かりから、文末の「たり」で描写される、木蔭に漏れる月の光への視点的移動に時間的落差が感じられるのであり、一方㉔の例も、「ければ」はこれまでしばしば夢のさとしがあった時間的経過を示すとともに、空間的あなた、あるいは伝聞事態とも見うるものである。このような空間、時間がない交ぜとなったあり方は、高橋亨（一九九二）が「心的遠近法」と述べるあり方に極めて近いものといえる。

さらにこの、「けりゝたり」共起構文による遠近法構成というあり方は、坂田一浩（二〇一〇）の中で平安朝屏風歌詞書の動詞叙法について論じた際に言及した、

a 貫之が土左の日記かきたる、いつとせをすぐしけるに、家のあれたるところ

くらべこし波路もかくはあらざりき蓬生原となれる宿かな（恵慶集・一八二）

b 女ぐるま、もみぢ見けるついでに、また、もみぢおほかりける人の家にきたり。

よろづよをのべのあたりにすむ人はめぐるくや秋を待つらん（安和二年八月） 116

右の例とも軌を一にするものである。とりわけbの例は蜻蛉日記の例であることが特に注目される。このように日記本文のなかに屏風歌詞書があたかも埋め込み構成のようになっている点からも、両者のテクスト構成における連続性が考えられてしかるべきであろう。

この「けり」と「たり」の連動により形成される遠近法とは、換言すれば「あなた事態」対「あなた事態」の対立からなる視界構造ということになるが、それはまた、一文の中にとどまらず、センテンスをも超えて構成される。例えば前掲㉔の例に後続するのは

見れば釣殿とおほしき高欄におしかかりて、中島の松をまほりたる女あり。そこもとに、紙の端に、書きて、かく押しつく。（中略）

ささがにのいづこともなく吹く風はかくてあまたになりぞすらしも

とものして、もて帰り置きけり。という一節であるが、ここにおいて「もて帰り置きけり。」は㉔

の引用中の「もて来たり」と、「あなたうこなた」の対応をなしているのである。

四、蜻蛉日記における「めり」の表現機能と表現領域

次に本作品中の「めり」に関する考察に移る。そもそも平安和文における「めり」の表現機能に関しては、『あゆひ抄』にめりは他にまかせて言ふゆゑに遠く、我が上にはいはず。

(稿本『あゆひ抄』)

右のような極めて示唆的な言及がみられる。ここでまず注目すべきは「我が上」、すなわち「わがこと」を述べてないという指摘であろう。この点につき、蜻蛉日記における具体的様相をみるに、地の文の「めり」は全六八例、うち「わがこと」を述べてたものは見出されず、この点、「たり」「けり」のありようとは対照的である。次に「たり」「けり」において試みたと同様、活用形によるテキスト構成機能の相違をみるため、文末形と接続形に分けた上で用例を検するに、接続節末の「めり」(「めれば・めれど」)においては全十九例中十二例で「わがこと」との対照叙法が見られ、きわめて特徴的なテキスト構成のあり方を示している。

③⑤見る人もいとあはれに、忘るまじきさまに語らふめれど、人の心はそれにしたがふべきかと思へば、ただひとへに

かなしう心ほそきことをのみ思ふ。(天曆八年十月) 25

③⑥されどここには例のほどに通ふめれば、ともすれば心づきなう思ふほどに、ここなる人、片言などするほどになりてぞある。(天徳二年) 44

③⑦椿市にかへりて、落息など言ふめれど、われは猶精進なり。(天禄二年七月) 195

③⑧若き人こそかやうに言ふめれ、我ははるのよのつね、秋のつれづれ、いとあはれ深きながめをするよりは、残らん人の思ひ出にも見よとて、絵をかく。(天禄三年九月) 242

ここに挙げたいずれの例においても、「めれば／めれど」によってひとごと事態を述べてつつ、それに後続する部分で自己の心情の吐露(と思ふ)、一人称の「われ」が見られるといった、共通した構造が看取される。

一方、文末形においては、このように顕著な形での対照叙法は確認しがたい。それでは文末形(および非対照叙法の接続形)において、「めり」はどのようなテキスト構成機能を示しているのだろうか。

ここで再び参照されるべきは「他にまかせて言ふゆゑに遠く」という、さきに引用した『あゆひ抄』の一節である。その意味するところは甚だ含蓄に富むだけに、多少難解なものを含んでいるが「他にまかせて言ふ」とは、やや俗な表現を用いれば、言質を取られないために発話主体が本来負うべき言明の責任を回避する、ということであろうし、ゆえに「遠く」とはつまり、

このような態度から生じた、表現主体が当該対象に対してとる、心理的距離の謂いであると解される。そしてこの「遠さ」ということが、「めり」によるテキスト構成機能を解明する上で一つの鍵となるのである。このことを確認するために、こなた事態を述べ立てる「たり」を指標としつつ、「めり」と「たり」が近接して現われている例において、両者の関係性をみることから始める。

③十日。おほやけは八幡の祭のことのしる。我は、人のまうづめるところあめるに、いとしのびて出でたるに、昼つ方婦りたれば、あるじの若き人々、「いかでもの見ん。まだ渡らざなり」とあれば、帰りたる車もやがて出だし立つ。
(天禄三年二月) 227

④返りごとものして、いとよげにあめれど、よにもあらず、今は人しれぬさまになりゆくものを、と思ひすぐして、あさましううちとけたるところおほくてあるところに、午時許に「おはしますく」とののしる。(天禄三年二月) 209
④わがしる人、おほかたのことを行ひたれば、人々おほくさしあひたり。(康保元年七月) 64

④三月三日、節供など物したるを、人なくてさうざうしとて、ここの人々、かしこの侍に、かう書きてやるめり。たはぶれに、

桃の花すき者どもを西王がそのあたりまでたづねにぞやる

すなわちかい連れて来たり。(安和三年三月) 101

④人々「御かゆ」などけしきばむめれば、「例食はぬものなれば、なにかはなに」と心よげにうちいひて、「太刀とくよ」とあれば、大夫とりてすのこに片膝つきてゐたり。(天禄三年二月) 208

これらの例における「めり」と「たり」の対応を注意深く検討してみると、「わがごとくひとごと」の対立の代わりに「たり」近めり「遠」という関係性が前面に出ているものが多い。

③の例はさきほど見た「わがごとくひとごと」の対照叙法の例として本来挙げるべきものであるが、ここでは「めり」と「たり」の対応によって、ひとごとの遠、わがことの近の対立を構成している点が注目される。④も同様の構造として解釈できる。すなわち「あさましううちとけたる」こなた事態に対し、兼家からの文の到来を、心理的距離をとりつつ「めれど」で述べ立てているのである。また、④と④は同じ構造のものとして理解できる。すなわち両例とも「めり」によって記主からはやや間遠なところで行われた下準備(④)や伏線(④)が述べ立てられ、その帰結・効果が「人々おほくさしあひたり」「すなわちかい連れて来たり」というこなた事態として記主の目の前にたち現われた、このように捉えることができる。④においては、「めり」が述べ立てる、人々が「けしきはむ」事態と、「たり」により描写される大夫(道綱)の挙動とは、明らかに記主の視界としては前者が遠、後者が近となる。

今度は目を転じて、視界構造における「めり」と「けり」の対応関係につき、みてゆく。

そもそも蜻蛉日記において「めり」は、記主周辺の侍女・従者の挙動にしばしば用いられているが、同様の事態に「けり」が用いられることもある。その場合、両者には

こなたでの従者の挙動には「めり」、あなた（先方）における挙動には「けり」

という使用区分の存在が確認される。

④とばかりあれば、文ささげて来る者あり。そこにとまりて御文と言ふめり。(安和元年九月) 91

・三月三日、節供など物したるを、人なくてさうざうしとしてこの人々、かしこの侍にかう書きてやるめり。(安和二年三月) 101 (④に既出)

⑤人とりて入りぬるほどに、使はかへりにけり。かしこ、いかやうにか定めおぼしけむは知らず。(安和二年六月) 111
⑥さて、そのころ、帥殿の北の方、いかでにかありけん、ささの所よりなりけりと聞きたまひて、この六月所とおぼしけるを、使、持てたがへて、いま一所へ持ていたりけり。

(安和二年六月) 112

これらの対応から、「けり」は視界構造の上では「めり」よりもさらに遠い領域を指し示しているという想定も成り立つであろう。この点、次の例はどうであろうか。

⑦祭の日、いかが見ざらんとて出でたれば、北の列になで

ふこともなきびりよう毛、後、口うちおろして立てり。口のかた、簾のしたよりきよげなる搔練に紫の織物重なりたる袖ぞさし出でためる。女車なりけりと見るところに、(中略) おどろきて目をととめてみれば、かれが出で来つる車のもとには、赤き人、黒き人押し凝りて、教もしらぬほどに立てりけり。よく見もていけば、見し人々のあるなりけりと思ふ。(天延二年十一月) 293

この用例に見られる「たり(り)」「から」「めり」、「めり」から「けり」への推移は、視点が記主自身の周囲から次第に遠くへ及んでいく過程を端的に表している。それはあたかも映画において、カメラのアングルを徐々に手前から遠方に転じ、かなたの対象に狙いを定めてズームインするかのような効果を生み出している。

⑧さる心ちなからんにひかれて、又、知足院のわたりにも
のする日、大夫もひき統てあるに、車ども帰るほどに、よろしきさまに見えける女車のしりに続きそめにければ、おくれず追ひ来ければ、家を見せじとにやあらん、とく紛れ行きにけるを、追ひてたづねはじめて、又日かく言ひやるめり。(歌) とてやりたるに、さらにおほえずなど言ひけんかし、されどまた、(歌) といひやりけり。(天禄三年四月) 232

右の例では、「けり」の連続使用の中にあつて、「めり」が一つだけ顔を覗かせているが、ここで「けり」が述べ立てている事

態はおそらく、記主の視界の圏外にあった出来事であろう（外出の帰りに道綱が女車を見つけ、母の車からはぐれて追跡していったものと読める）。伝聞事態とも読み取れる文脈である。これに対して「かく言ひやるめり」というのは記主の目の届く範囲で起こった事態と見得る。

このように見てくると、「めり」が述べ立てる視界領域は「たり」と「けり」の中間に位置づけられるのではないかといえそうである。ごく単純に図式化すれば、記主の視点を中心として、「たり」―「めり」―「けり」の各領域が、同心の三重円を描いていくイメージである¹²。あえていえば「めり」が示す領域は、「たり」における「こなた事態」、「けり」の「あなた事態」に対して、「そなた事態」とでもいうべきものではないだろうか¹³。

五、蜻蛉日記における「たり」「めり」「けり」

―その視界構造の背景にあるもの

前節までの考察において、蜻蛉日記中の「たり」「めり」「けり」が織りなすテキスト構成の諸相と、その基盤をなす視界構造について明らかにしてきた。本節ではさらに、このような視界構造の本質を違う角度から捉えつつ、それがはたして何に根ざし、当時の言語生活にとっていかなる意味をもつかについて検討していく。

その前に我々がまず認識しなければならないのは、当時の人々（平安貴族）の事態把握における物理的制約・障碍が、我々現代人の感覚では測りかねるものだったであろうということ、だからこそ我々は、当時の作品の読解にあたってその制約から生じる、その時代なりの「視野」に想像的に分け入っていかなければならないということである。

この点につきもう少し具体的に述べる。そもそも当時の人々がある事物なり、事態なりを直接目の当たりにする機会というのは、我々の想像以上に少なかったのではないか。まず、当時の殿舎・調度のあり方に起因するものとして「物越しに」見る、ということがある。さらに当時の生活習慣により、夜間あるいは暗所にて事態を把握することが多かった、ということがある。あるいは、祭り、儀式などにおいて物理的な制約からその次第を遠くに見る、ということも当然多かったはずである。視覚におけるこの「障、暗、遠」の三つの遮蔽要素は、平安朝の作品の場面描写に絶えず付き纏うものといつてよい。そしてこのような状況における知覚のありようを反映した言語形態が当時の言語において存在していたとしても何ら不思議はないであろう。それがとりも直さずここで考察対象である「たり」「めり」「けり」をはじめとする一連の助動詞だったのではないかと私は考える。

動詞でいえば「垣間見る」「ほの見る」というのがまさにこのような状況を端的に表すことばであろう。これらの語が当時

の言語生活において持つ比重は、例えば伊勢神宮の遷御の儀を、誰でもインターネットを通して比較的至近距離からの画面として見ることができるような状況にある現代人の想像を絶するものであったろう。我々が当時の作品を読解するにあたっては何よりもこの点に思いをいたさなければならぬ。

「たり」「めり」「けり」が当時の貴族階級の生活空間・生活様式と、それに対応して形成された空間認識のあり方に根ざした視界構造の表示形式として機能し、その反映としてテクスト構成がなされる―このように考えた場合、「たり」の現場直視に対して、「めり」は現場の事態に臨んで、あなたも簾や蚊帳を通して見るごとき視覚のありようを示していたと思われる。

『あゆひ抄』にいう「めり」の「遠さ」は、このようなどころにも胚胎しているとみるべく、とりわけ「物越しに」目の前の事態を目にすることの多かつた貴族の女性にとつて、「めり」はその知覚様式を端的に表明するのに格好のものとして機能していたのではないか。例えば、

④車さしわたして、幕などひきて、後なる人ばかりを下ろして、川に向かへて、簾まきあげて見れば、網代どもさしわたりたり。(安和元年九月) 90

右の例では「簾まきあげて見」たからこそ、その視界が「たり」で表現され得たとも考えられ、また、

⑤さながらさし渡りぬめり。また鯉、鱸などしきりにあめり。ある好きものども、酔ひあつまりて、「中略」とも言ふ

めり。(安元元年九月) 96

右の例における「めり」の局所的、集中的使用なども、障屏具による間接的隔てを通しての視野を表現したものとみてその理由がはじめて納得できるのではないか。

その一方で「けり」は⑤⑥の例からも窺えるように、目を凝らして漸く認めうるあなたの視界、あるいはこなたからは伝聞によつてしか知り得ない決定的な隔絶、あなたなる世界を表していたといえよう。

以上の消息を各助動詞ごとに簡潔に表現すると以下のようならうか。

たり Ⅱ直視

めり Ⅱ隔見・仄見

けり Ⅱ遙望・伝聞

和語ではそれぞれ、「ただに／物越しに／あなたに」見る、といったところであらう。

「たり―めり―けり」による同心円状の空間的視界構成はまた、表現主体の、対象との心理的距離（親疎）をも象徴し得る。例えば第二節に挙げた体験時のこなた事態を表す「けり」(④、

⑦) は、いずれもいわゆる「気づきの『けり』」であるが、そもそも「けり」における気づきの用法は、事態を表現主体の心理になじまないものとして「異化」する作用をもつと考えられる。そのため、これらの例では、空間的こなたの事態を述べ立てな

がら、心理的にはそれを「あなた事態」として捉えているものと解釈されよう。

また、「めり」はその物理面での「遠さ」が心理的「遠さ」に転じる可能性を常にはらむ助動詞である。このことを示す例として次に、記主の夫兼家、子の道綱の挙動に「めり」が用いられたケースをそれぞれ挙げてみる。まずは兼家の場合である。

⑤¹されどここには例の程に通ふめれば、ともすれば心づきなう思ふ程に、(天徳二年) 44

⑥²かくてあるほどに立ちながらものして日々にとふめれど、ただ今は何心もなきに、穢らひの心もとなきこと、おほつかなきことなど、むつかしきまで書きつづけてあれど、物

おほえざりしほどのことなればにや、おほえず。(康保元年七月) 62

⑦³では「心づきなう」の一語によっても記主の兼家に対する心の隔たりを押し量ることができ、「めれ」もそのような心情に沿って用いられたものと理解できる。また⑧の例では「ものおほえざりし」時のこととて兼家の日々の来訪も「おほえず」といった疎さが「めれど」の一言によく表れている。

他方、道綱の挙動における「めり」の使用に関しては、道綱の、女性との和歌の贈答に関する場面(下巻)に集中的に「めり」が現われているという事実が注目される。

⑨⁴小鷹の人(＝道綱)鷹ども外にたちいでてあそぶ。もあれば、例のところにおどろかしにやるめり。

狭衣のつまも結ばぬ玉の緒の絶えみ絶えずみ世をやつくさん(天延元年九月) 253

⑩⁵ 葛城や神代のしるし深からばただ一言にうちもとけなむ返りごと、こたびはななめり。(天延二年十一月) 295

⑪⁶ 負けじと思ひ顔なめれば、また、大空もくものかけはしなくはこそ通ふはかなき嘆きをもせめ(天延二年十一月) 295

⑫⁷ たちかへり「いとほしう」など言ひて、わがおもふ人は誰そとはみなせどもなげきの枝にやすまらぬかな

などぞ言ふめる。(天延二年十二月) 299

異性との和歌のやり取りを目にするにつけ、我が子道綱が母の手から離れ、母の関知し得ない領域を獲得していく過程にあることを実感した記主にとって、我が子のこのような行動を描写するには、「たり」や「けり」では帯に短し襷に長しで、「めり」の間合いを必要としたのではないだろうか。恋に目覚め自立しつつある「道綱の世界」はその母にとって、「めり」が表す心理的距離感をもってはじめて、的確に表現しうるものだったのである¹⁾。

さてこれまで本節において論じてきたのは、体験時の視点に立った視覚構造であった。その一方で「けり」には、体験時のみならず叙述時の視点に立った用法が見られること、第二節に

において指摘した通りである。ではこのような「けり」の用法は、ここでみてきた視界構造に対して、いかなる関係に立つものがあるのか。「けり」は現場に身を置いた叙述に用いられている場合は現場における遠近法を示しているとみられるが、叙述時の視点での述べ立てについては現場時と叙述時の間の遠近法を示していると考えられる。すなわち、叙述時の「けり」は述べ立ての対象（体験事態）を、叙述の時からみて、「時間的あなた事態」として捉えているのである。ここでは第二節において挙げた例⑥⑦⑧にみられるようなわがこと事態をも一種のあなた事態として述べ立てているのである。つまり叙述時の「けり」が示す叙法とは、現場の視点・視界構成そのものを客体化し、ひとごと・わがことをひっくりかえり、改めて叙述の時に軸足を置いて「あなた事態」として眺めるものであるといえよう。

まとめにかえて

以上述べてきたことを要約すると次のようになる。

①蜻蛉日記地の文における「たり」「めり」「けり」は記主の体験時における視界構造をテクスト上に形成する。

②このうち、

・「たり」はわがこと・ひとごとを問わずこなた事態を述べ立てる。

・「けり」はあなた事態で、接続節中においてはとりわけひとごとを述べ立てる。

とこととを述べ立てる。
・「めり」は前二者の中間に位置するそなた事態で、ひとごとを述べ立てる。

③このような視界構造は物理的遠近と同時に心理的親疎をも表象する。

④それはまた、当時の生活空間・生活様式に根ざし、これらを反映するものである。

⑤叙述時の「けり」は体験事態を客体化し、それを叙述の時点から「あなた事態」として眺める視点をもつ。

【注】

(1) 井島正博（二〇〇九）などがその代表的なものである。

(2) ここでいう「視界」とは、物理的・心理的双方のレベルにおいてのものである。このことは第四節において改めて論じる。

(3) ここでいう「めのまへ」「非めのまへ」については坂田一浩（二〇〇九）を参照。簡単に言えば、表現内容が発話時における表現主体視目の事態が否かという区分である。

(4) これらの概念規定については三谷邦明（一九七四）、糸井通浩（一九八六）、渡辺久壽（一九九〇）にその多くを負う。

(5) 以下、掲出本文は岩波文庫版『蜻蛉日記』（今西祐一郎注）によった。用例下のアラビア数字は同書における頁数を示す。

(6) 渡辺実（一九九一）では「話手自身のこと（「わがこと」と呼ぶ）として把握するか、話手に関わりなく成立すること（「ひとごと」と呼ぶ）

として把握するか」の区別であると述べる。また、蜻蛉日記における「わがことゝひとこと」に関しては神尾暢子（一九八一）に具体的な考察がある。

- (7) 「AわがことゝBひとこと」「aこなた事態ゝβあなた事態」両対立軸は相互に排他的な (mutually exclusive) 概念ではない。そのため両項の掛け合わせで $2 \times 2 = 4$ 通りのケースが理論上は想定できる。ただし「わがこと」かつ「あなた事態」の場合のみ、実際の用例が非常にまれである。すなわち、

	A	B
a	○	○
β	△	○

- (8) ここでいう「引用節」では会話中の例は除き、「あさましさに、見てけりとだに知られんと思ひて書きつく。」のような心内語引用節末尾のものに限った。

- (9) 以下便宜上、文末の「けり」を「文末形」、接続節末の「けり」を「接続形」と呼ぶ。

- (10) Ⅰに比べ、「けり」の動作主に記主、兼家など人物が多く、情景描写が影をひそめるのが何よりそれを裏付ける。

- (11) 「たり」はわがことゝひとことに関してはニュートラル、「けり」は接続形においてのみ強いひとこと性を示し、「めり」は基本的にひとこと性の助動詞であるといえよう。

- (12) 「ためり」「たりけり」のような複合形の存在をもって、「たり」が「めり」「けり」とそれぞれ等位的関係で視界構造を形成するという本稿

の捉え方に対して反論する向きがあるかもしれない。助動詞の相互承接という観点から見ると、いかにも「たり」は「めり」「けり」とは表現の次元を異にするように見える。しかしこれら助動詞複合形における「たり」は、当該事態の現実における生起の確実性、已然性、持続性を示しているのであり（このことは⑩の「行ひたれば」を「行ふれば」に置き換えてみれば一日瞭然であろう）、他の助動詞が下接しない露出形の「たり」が示すめのまへ性、こなた事態の述べ立てという特性は、他の助動詞の下接によりもはやここでは希薄化しているものと私は見る。

- (13) このような三重円形式による事態把握は古代人の事態認識の基本構造として、至る所にその片鱗を覗かせているように思われる。言語表現のレベルでまず想起されるのは例の「コソア（＝カ）」の構造であり、さしづめコは「たり」に、ソは「めり」に、またア（＝カ）は「けり」とそれぞれ、何らかの対応を持つといえるかもしれない（竹岡正夫も「けり」を「物語のあなたなる世界を述べ立てるもの」と定義している）。また、西郷信綱は古事記神話にみられる世界観として、「高天原―葦原の中つ国―黄泉の国」の三重構造を指摘するが、同時にこれは、古代人の生活圏認識における「中心―周縁」構造の反映であったと述べる（『古事記の世界』岩波新書、二二六頁）。

- (14) ちなみに女性との和歌の贈答の場面以外での道綱の動作は「たり」「けり」による叙述が中心で、「めり」による述べ立ての例は確認できない。

【参考文献】

井島正博（二〇〇九）「中古語過去助動詞の意味解釈」『国語と国文学』八六・一一

糸井通浩（一九八六）「王朝女流日記の表現機構―その視点と過去・完了の

助動詞―」『国語と国文学』

神尾暢子（一九八二）「蜻蛉日記の表現と文体―「ひと」と「われ」と―」

『二冊の講座 蜻蛉日記』（有精堂）

坂田一浩（二〇〇九）「めのまへ性」という観点の導入による古代語助動詞の分類に関する一卑見」『国語国文学研究』四四号

坂田一浩（二〇一一）「平安朝屏風歌詞書の叙述様式―動詞叙法、とりわけ

『けり』の使用をめぐって―」『国語国文学研究』四六号

高橋 亨（一九九二）『物語と絵の遠近法』ぺりかん社

竹岡正夫（一九六三）「助動詞「けり」の本義と機能」『言語と文芸』五卷六号

塚原鉄雄（一九八一）「蜻蛉日記の方法」『二冊の講座 蜻蛉日記』（有精堂）

所収

三谷邦明（一九七四）「古代叙事文芸の時間と表現（下）―源氏物語に於ける時間意識の構造―」『文学』一九七四・二

渡辺久壽（一九九〇）「蜻蛉日記の意識構造」『女流日記文学講座』第二卷

渡辺 実（一九九二）「わがこと・ひとこととの観点と文法論」『国語学』一六

五

本稿は、第一一八回黒髪古典研究会での発表内容をもとにしたものです。席上、多くの方々から貴重なご意見を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

（さかた かずひろ／大学院文学研究科第二九回修了）